

## 閉会の辞

黒柳 米司

最後に、私が司会者として、ごく大ざっぱに、今回のお話全体を聞いての感想などを申し上げて閉会としたいと思います。何よりも私を感じますのは、今私たちは、歴史の歯車が音をたててぎしぎしと動いているところを目撃しているんだと実感いたします。その限りでは、私自身は朝鮮半島の専門家ではありませんけれども、アジアのことを研究する者として、ある種の喜びをもって注目しています。

そして、同時に、この朝鮮半島における状況の変化というものが、明らかに朝鮮半島の平和、安定、ひいてはアジア太平洋の平和にもよい影響を与えるものではないかと考えて、日本市民としてこれを歓迎したいというふうに考えております。

「ベルリンの壁崩壊以来」という言葉は、これまで冷戦の崩壊を意味するまくら言葉として世界じゅうで使われてきましたけれども、望むらくは、「三十八度線の雪解け以来」という言葉が、アジア・太平洋における冷戦構造の崩壊を象徴する言葉として定着することを強く望みたいと考えます。

今回のお話の中にも、我々が教訓として学ぶべきものが非常にたくさん含まれていました。代表的なものだけに限って申ししても、難しいことに挑んで挫折するよりも、易しいことから実現をし、着手し、そしてこれを積み上げていくことが必要であろうというような発言もありましたし、日本が朝鮮半島情勢にかかわって何もしないというのは、明らかに一つの具体的な選択であって、そのことがもたらすかもしれないマイナスは、何もしないという選択をしたも

の、ある意味では責任であるというようなことがございます。

また、中国の立場という事で、中国は、これまでの冷戦的な発想からいきますと、社会主義である北朝鮮寄りというふうにみなされがちではありませんけれども、ここでも中国は北の代弁者とならず、慎重な仲介役に努めるというふうなことも今回は教えていただきました。

たしかに朝鮮半島では、現在非常に激しい勢いで、あるいは我々の予想を超える速度で変化が生じているようですけれども、一方では、こういう変化に有頂天にならず、他方ではこのような変化に目を閉ざすこともせず、我々は、その中間にあるバランスのとれた視点で、朝鮮半島情勢をつぶさに見守っていく必要があるかと思えます。

朝鮮半島と日本の間には、狭い日本海という一つの水面があるだけでありまして、朝鮮半島情勢は、どこか遠いところで起きている我々と無縁の変化ではありませんし、日本人あるいは日本という国自身が、この国の、朝鮮半島における変化に対して、これを観客として見るだけではなくて、主役ではないまでも、そこにある程度の役割を果たす俳優として位置づけられざるを得ないという運命にあるということ、私どもは認識せざるを得ないと考えます。

本日の六人の先生方のお話をお伺いした上で、そこに込められているさまざまな知識や教訓をもとにして、今後の朝鮮半島の問題について注意深く眺めていくことが我々の責任でもあろうかというふうに考えますし、とりわけ本学の学生諸君にとっては、そのような確かな視点を育てるという上で、本日のシンポジウムが非常に実りあるものであったことを期待してやみません。

最後に、情報に富み、そして学ぶところの多いご講演をいただきました。パク先生、文先生、金先生、朱先生、永野先生、横堀先生、六人のご参加の方々、そして、パーフェクトな通訳をしていただきました近藤先生及び渡部さんのお二方にも心からお礼を申し上げて、本日のシンポジウムを閉会とさせていただきます。どうもご協力ありがとうございました。

ました。  
(拍手)